



地域とのかかわり
紹介します!

施設・事業所の 地域活動 レポート



No.1 特別養護老人ホーム

白十字ホーム

白十字ホームの運営理念「高齢者福祉施設は、高齢者が人間らしく生き、市民として生活する場であり、施設の主人公は高齢者であります」(表, P.12) に沿った取り組みとして、当ホームの利用者が社会参加をすることで、失われたり弱くなったりしている市民力の回復を援助してきました。この援助が、地域の高齢者や職員の社会参加の機会につながり、地域での活動が積極的に推進されています。また、地域の住民やボランティアからの「活動したいけれど場所がない」「地域で起こっている孤立化を何とかしたい」などの気づきや相談をうかがう中で、施設として何ができるかを共に考え活動してきました。

それでは、まず当ホームで実践している9つの地域活動を紹介します。



運営管理担当 部長

鈴木剛士

1999年特別養護老人ホーム白十字ホームに介護職として入職。2001年から生活相談員として勤務。2014年運営管理担当部長となり、現在に至る。社会福祉士、介護支援専門員。

施設概要



社会福祉法人白十字会

1911年2月東京で設立。結核予防・医療事業に取り組む。虚弱児童の寄宿制小学校開設（現在の特別支援学校）。1930年代に茨城県鹿島と東京都東村山に療養所開設。1960年代から地域医療に取り組む。1972年東村山市委託で公的な訪問看護を開始。医師会と「老人保健福祉事業」開始（1978年市社協事業化）。白十字ホームを含む市内3町をモデル地区として活動を展開。

特別養護老人ホーム白十字ホーム

住所：東京都東村山市諏訪町2-26-1

ホームページアドレス：<http://www.hakujuji-home.jp/>

設立：1967年 定員：170人

平均要介護度：3.8 平均年齢：87歳

短期入所生活介護：12人、通所介護事業所（認知症対応型含む）を併設。キャンパス内には病院、老人保健施設、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、訪問介護事業所、訪問看護事業所（定期巡回随時訪問介護看護を併せて実施）がある

ボランティア活動状況：登録360人（団体含む）、延べ約5,000人（年間）

立地条件：東京都東村山市の北部にあり、埼玉県所沢市と隣接しています。『となりのトトロ』のモデルになったと言われている八国山の麓にあり、緑が多い自然環境の中にあります。



おしゃべり電話倶楽部

地元のボランティアが中心になり運営している活動です。毎週火・金曜日18～20時に当ホームが相談室を提供し、ボランティアが一人暮らしの方や家族がいても淋しさを感じている方たちのおしゃべり相手になっています。相談内容が専門的な場合は、地域包括支援センターなどの相談機関を紹介しています。

近隣の地域住民を対象としており、広報誌「おしゃべり電話だより」は10年以上一度も途切れることなく毎月発行し、町内の回覧板や集会所、配食サービス利用者などに配布しています。

おしゃべり電話だより

2015.12.1
No.169

今年も大雨、台風など自然災害の多い一年でした。過去の大災害を含め、まだ復興途上でご苦労されている方も多数おられます。毎年くり返される災害には防災、減災について、日頃の対応力を高めるとともに災害への準備の備えにも心がける必要があることを強く感じます。年末に向かっても賑わいとなり何かと気忙しい時期ですが、どうぞ健康増進にはくれぐれも留意の上、良い新年を迎えられますようお祈りいたします。おしゃべり電話を今年もご利用、ご協力いただきありがとうございます。

【見直し介護保険種々話】(くささばな)

介護保険制度が始まって15年、当初と比べると利用できる介護保険サービスの種類が増えました。そのため、複雑になって分かりにくいとされています。高齢になって生活のいろいろなところで支障がひつようになると、住み慣れた自宅や地域で暮らし続けるためにはどのようなサービスを利用すればよいのか、高齢者や家族にとっては、情報も少なく難しいものです。

「生活」はいろいろな場面がありますので、介護保険は各種サービスを「組み合わせ」て利用することが特徴です。一人ひとりに応じた「自立支援」が実現できる、具合の良いサービスを組み合わせることが「ケアプランをつくる」といえます。

制度ではご本人や家族がつくることも認められていますが、大変複雑なことから「ケアマネジャー(介護支援専門員)」(以下ケアマネ)に依頼して作成してもらうことが当たり前になっています。ケアマネは、個別の状況や実態を把握し、行政、介護事業者や地域の関係機関等と連携しながら、その人らしい自立した生活を回復したり実現するためのケアプランをつくるのが主たる役割となっています。また、「地域包括ケア」をすすめていく上で、大切な役割を持っています。それだけにオールマイティを期待されることも少なくないようです。しかしそれは人間、すべてを担うことはできません。サービスを組み合わせるだけでなく、地域や関係機関とのネットワークを活用することができるケアマネが求められていると言えます。そう言うケアマネはどれだけ出会えるのか・・・次回に

西岡 輝(白十字ホーム員)

『からだに備わっている力=生命力のおはなし』

私たちの体は、自分で意識しなくても呼吸をし、状況によって心拍数を変え、消化や排泄をしています。これらの働きは自律神経のおかげです。起きている時や緊張している時、ストレスを感じる時には交感神経が、寝ている時やリラックスしている時には副交感神経が優位になります。両方が大切で、二つがバランスよく働くことが望ましいです。

佐藤文孝(白十字ホーム理学療法士)

子育て活動(子育てサロン「ポレポレ」)



毎週木曜日11～16時に当ホームの会議室を開放し、地域の0～2歳児くらいの子どもたちを対象に、子育てサロン「ポレポレ」の活動を行っています。

シニアボランティアとお母さん、市ファミリーサポートの方が運営委員会を設立し運営しています。当ホームの利用者と子どもたちとの交流も生まれています。

食事会活動

地域の3カ所の自治会館で、それぞれ毎週1回昼食会を開催しています。

食事は当ホームから提供し、運営は各地域のボランティアの方が行います。ボランティア、社会福祉協議会と年1回運営会議を開催し、都度、その後の活動の検討や方向性を話し合っています。



サロン活動

ホーム内の喫茶ラウンジを使って、2つのグループが隔週で食事会・おしゃべりや音楽活動を楽しんでいます。ボランティアが中心となって運営し、地域包括支援センターや社会福祉協議会が協力しています。市内の他地域で運営する小規模デイサービスやグループホームでも活動を進めています。



外出活動



介護タクシーの協力で、当ホーム利用者と地域の高齢者が相乗りし、買物や公園・博物館などに月2回外出しています。1回1人600円です。地域の高齢者はドアツードアの送迎をしています。ボランティア、ケアマネジャー、地域包括支援センター、当ホーム相談員による運営会議を毎月実施し、都度、その後の活動の検討や方向性を話し合っています。

里孫活動



地域の小学校の5年生・6年生が4人一組となって、当ホームの利用者2人とチームになり、2年間の継続的な交流活動をしています。教員、保護者、ボランティア、社会福祉協議会と当ホーム職員によるボランティア会議で運営しています。1992年から開始し、これまで地域の子どもたち2,500人以上が参加してきました。





配食サービス

地域の75歳以上の単身高齢者または高齢者夫婦を対象に、365日の夕食を提供するなどの配食サービスを行っています。配食数は、1日100～110食で、市委託事業と当ホーム独自事業を併設しています。市委託事業は月～金の5日間実施し、独自事業は土・日の配食を実施することで、365日間のサービス提供を実現しています。独自事業のサービスは、市委託事業の対象とならない、例えば日中一人暮らし高齢者、障害者など、地域包括支援センターで必要と判断された方を対象にしています。



就労支援活動

市内の障害者ネットワーク、障害者就労支援センターとの協働活動です。重度の障害者の方たちの福祉的就労支援のプログラムを中心に、一般就労につなげる中間就労型のプログラムにも取り組んでいます。

プログラムの内容としてはシーツ交換、食器下膳、車いす器具類清掃、ベランダプランターへの水やりほか管理、草むしりなどの作業を個人（パート）や事業所単位などで実施しています。



八国山フリーマーケット

2013年より年1回開催し、2015年の10月に第3回を迎えました。地域の中でさまざまな世代の方がつながりを持てたらいいなという思いから実行委員会を組織しました。地域の住民、障害者福祉施設職員などによる実行委員会に当ホーム職員も加わり、企画・運営しています。



地域高齢者と当ホーム利用者との 外出サービス

●外出サービス創設に至るまでの ソーシャルワーカーの役割

以前、当ホームで提供している配食サービスを利用されている方を対象に生活実態調査を行ったところ、加齢に伴う心身機能低下により行動範囲が制限されているという問題があり、地域の高齢者の孤立あるいは閉じこもりにつながる要因になることが分かりました。

そこで、2012年に地域に根ざす社会福祉法人として、当ホーム利用者にとどまらず、居宅介護支援事業所や地域包括支援センターと連携を図り、社会的孤立の恐れがある地域の高齢者を支援し、自律性が高まる機会をつくるために、介護タクシーを利用した外出サービスをスタートすることにしました。まず、当ホームの相談員は居宅介護支援事業所や地域包括支援センターなどの関係事業所、地域住民であるボランティアと運営委員会を組織し、活動の具体化へ向け準備を進めることにしました。そして、活動に協力してくれる介護タクシーを地域住民より紹介していただきました。さらに、外出の付き添い

に不可欠なボランティア確保のために、市内ボランティアセンターに継続的な活動の支援を求め、このサービスを創設することができました。

外出先として、市内や隣接する他市でのショッピング、博物館などの見学、名所観光などに出かけています。

●自分でモノを見て買い物できてうれしい

次に、地域の高齢者であるAさんの例を挙げ、ある日の活動を紹介します。Aさん（87歳、女性）は、B居宅介護支援事業所からの紹介を受け外出サービスに参加しました。要介護1の認定を受けていますが、認知症はなく、地域で一人暮らしをされています。市外に住む長女との関係は良好です。足腰が弱いため歩行器を使用しており、外出は大変なため、宅配サービスを利用しながら生活を送っていました。

ケアマネジャーからの情報では、デイサービスは1～2回利用したがなじめず、その後の利用につながっていないとのことでした。近隣に友人がいないことから、孤立して過ごしているため、外出サービスを利用することで、生き生きした生活を送ることが参加のねらいでした。

参加当日、当ホーム利用者2人が乗車した介護タクシーは施設を出発し、地域の高齢者宅2軒に寄り、最後にAさん宅へとお迎えに行きました。Aさん宅のチャイムを押すと、お化粧をしておしゃれな服装で出発準備万端のAさんが玄関より出てこられました。事前に顔合わせをしていたボランティアが、Aさんを車内まで誘導します。

ショッピングセンター到着後、ボランティア付き添いの下、食べ物や衣料品を中心に買い物を楽しまれました。帰りの車中でAさんは「自

表 白十字ホームの基本理念

高齢者福祉をすすめるための基本的認識

- 現代の高齢者は、我が国の激動の近代史および現代史を直接担った人々であり、その生き証人です。
- 在宅福祉サービス、施設福祉サービスを必要とする高齢者は「高齢障害者」です。
- 高齢者福祉施設は、高齢者が人間らしく生き、市民として生活する場であり、施設の主人公は高齢者であります。
- 高齢者福祉施設に働く職員は、高齢者の生活支援者であり、基本的人権の擁護者であります。

分でモノを見て買い物ができるうれしかったわ。娘にも報告しなくっちゃ。また誘ってね」と喜ばれていました。

運営委員会で参加の様子について振り返ったところ、介護保険制度下にあるデイサービスについては「なじめなかった」とおっしゃっていたAさんが、とても楽しい時間を過ごせたことに、ケアマネジャーもAさんが住み慣れた地域で生き生きと暮らし続けるためのサービスとして手ごたえを感じたようです。

●外出サービスの効果



Aさんは要介護認定を受けていて、ケアマネジャーがいるにもかかわらず地域で孤立した生活を送っていました。既存の介護保険サービスではニーズが充足されず、ほかの社会資源やサービスもAさんにマッチするものではありませんでした。そのような中、当ホームが持つ人材やノウハウを活用した外出サービスに参加することで、Aさんの自律性が高まり、生活の中に「ハリ」が生まれることにつながりました。

ソーシャルワーカーが中心となり、地域の中での孤立を防ぎ自律した生活が送れるサービスとしてスタートした外出サービスですが、継続していく中で参加者による茶話会の開催や、新たなボランティアの開拓にもつながっています。今後もこの外出サービスが新たな展開や発展が

できるように、関係機関や地域住民と連携しながら活動していきたいと思います。

地域に密着したイベント 「八国山フリーマーケット」

●八国山フリーマーケットの目的

開催の目的は、当ホームおよび同一敷地内の白十字会事業所と地域住民との交流にとどまらず、近隣住民相互の交流を通じて、高齢者福祉の理解と共に、住民相互そして施設との連携・協力を高め、地域の福祉文化を充実する大切な機会とし、安心して暮らし続けることができる町づくりに寄与することを目指して開催しました。

運営に際しては、地域の住民、障害者福祉施設職員などに当ホーム職員も加わり実行委員会を組織し、企画・運営を行っています。地域の課題を当事者として抱えている地域住民の方たちが、自分の町をよくしていきたいという目的を持ち、自分の町のイベントとして企画・運営に参加されていることが、地域に密着したイベントにつながっているように感じます。年々出店団体も増え、今年は29の団体が出店しました。

●大いに盛り上がる地域イベントとして



当日は好天に恵まれ、来場者は開会の時間から順調に会場である当ホーム駐車場を訪れまし

た。ステージでは、地元諏訪町のお囃子のグループによるオープニングアトラクションが行われ、賑やかな雰囲気の中幕を開けました。その後、町内の障害者福祉サービスに通所されている利用者によるバンド演奏や当ホーム利用者による太鼓の演奏、普段から当ホームで活動しているボランティアによる歌声コーナーがあり、会場は大いに盛り上がりました。また、フリーマーケット会場での販売のほか、ホーム厨房で準備したカレーライスや焼きそばといった模擬店コーナーを設置し、お昼時には大勢の方で賑わっていました。

当ホームの利用者も大学生ボランティアに車いすを押してもらいながら、一般の来場者に負けず、フリーマーケット会場の隅々までお店を見て回り、普段とは異なるワクワクした表情で買い物を楽しんでいました。大きな事故もなく、出店された方や来場者の笑顔が数多く見られたことが印象的でした。

●施設が持つ専門性や実践ノウハウを地域に還元

地域では世代に関係なく単身世帯、二世帯が増加している中で、地域で暮らしているながら「孤立」している状況が社会的な関心を強めています。地域の中での世代間交流の機会を増やすこと、他世代（高齢者だけでなく若い世代も）が共に見守り支えあって、地域で暮らせる町づくりが今後必要となっていきます。

地域の中の世代間交流の機会を増やすためには、日頃からの地域との関係づくりが不可欠です。しかし、地域との関係は一朝一夕では築けず、決して簡単なことではありません。日頃から地域での困りごとやニーズに対し、ソーシャ

ルワーカーが中心となり、社会福祉施設が持つ専門性や培ってきた実践ノウハウを駆使しながらサービスを地道に地域で展開することで、地域からの信頼が積み重なっていくことが大切だと思います。

ソーシャルワーカーとして求められていること

我が国では、高齢化が諸外国に例を見ないスピードで進行する中で、2025年に向けて地域包括ケアシステムの構築が推進されています。これまで、特養のソーシャルワーカーは、主に利用者の生活の質を向上させるため、地域の社会資源を活用したり、地域住民や関係機関とネットワークを構築したりしてきました。

特養には、これまで培ってきた豊かなノウハウ、専門性を持った人材、設備があります。これからは、利用者を含めて地域の誰もが住み慣れた町で安心して暮らし続けられるように、特養が地域の社会資源である意識を強く持ち、地域に目を向けていくことがこれまで以上に求められていると思います。そして、特養という現場で磨いてきたソーシャルワーカーの専門性を地域に向けて発揮し、特養のソーシャルワーカーにしかできないこと、特養のソーシャルワーカーだからできることを、これからも地域に発信していけるように努めたいと思います。